現在のキュウリ

- 白イボ
- 長さ 18 ～ 20 センチ
- 長日性
- 節成性

畔藤キュウリ

- 黒イボ
- 長さ 30 ～ 35 センチ
- 短日性
- 飛び節成性

収穫時期：６月下旬～７月上旬
販売場所：しらたか産直愛菜館

孫の代に移り変わると作付けが拡大。昭和10年代に入ると、畔藤キュウリは八百屋の店先で賑わうようになり、どの農家でもキュウリと言えば畔藤キュウリを栽培していたといわれています。

しかし、昭和30年代から現在の白イボキュウリのように小さく、収量性の高いものが流行し始めると、それに比例するように収量性の低い畔藤キュウリの栽培面積は減少。そして昭和40年、ついには市場から完全に姿を消してしまいました。

種子の保存と伝統の継承

そんな中、一度は手放してしまった畔藤キュウリを再び手にし、立ち上がったのが、畔藤キュウリ保存会会長の新野惣司さん（広野）です。

畔藤キュウリ保存会
会長 **新野 惣司**さん

新野さんは「地元に愛作され、親しまれてきた畔藤キュウリの伝統を絶やしてはならない」との思いから、昭和45年に地元農家の人たち約10人と同保存会を結成。その後、会員が自身一人だけになった今もなお、種子の系統保存に力を注いでいます。

しかし現在、畔藤キュウリの栽培者は新野さんのほかに数人いますが、採種の技術を持っているのは新野さんのみ。未だ消滅の危機に立たされていることに変わりはありません。

そんな中、小さいうちから地域に根付く伝統野菜に親しんでもらおうと、ひがしね保育園では新野さんから畔藤キュウリの苗をいただき、園児たちが協力して育て、食する取り組みを行っています。畔藤キュウリの作付拡大は難しい状況とされていますが、こうした取り組みが、伝統を次の世代へと引き継ぐきっかけとなっています。

また、白鷹町から離れた地で新たに畔藤キュウリの魅力と出会い、そこに秘められた可能性を引き出そうとしてくださる方たちもいます。

早朝５時。立派に育った畔藤キュウリを収穫する新野さん

育てた畔藤キュウリでのり巻きを作るひがしね保育園の園児